

# 譬え話の構造分析の試み

## —— ルカ福音書15章のテキスト分析 ——

三 宅 光 一

### は じ め に

本論の目的は、具体的なテキストを使用して実地の構造分析をすることに限定される。この方針に従い、共観福音書の一節を取り上げてみる。

言うまでもなく、このテキストは信仰上の真理ともみなされている。それ故、分析箇所も信仰共同体の物語という見地から教会教義に則って扱ったり、あるいは聖書の文献学的対象として解明することも可能であろう。だが本論では、表層構造の物語レベルに働きかけながら、ルカ福音書15章でのイエスの言述の全容を構造的に明らかにする。テキストのなう意味論的世界に関して言えば、本論はそこへの探求を準備するに留まる。

かくして、構造分析の試みという性質上、以下のような問題は考慮外である。つまり、当該テキストの、共観福音書内外との比較対照（例えば、マタイ伝と共有する物語構造の比較による考察）、あるいはギリシア語聖書と英訳聖書の差異化、英訳聖書の異文の多様性などの問題。構造主義的分析は、たとえ恣意的なテキスト選択でもあっても、それを分析対象に定めた以上、どこまでもその分析を基本とする。特定のテキストが如何なる構造を実現しているか、それが眼目である。ここでもやはり、以下の基本的方向は堅持しなくてはなるまい。すなわち構造を解明する限り、解釈に基づく意味内容を吟味するわけではないという方向である。課題は *explication* であって *interpretation* ではないというのは、まさにその意味において至当である<sup>1)</sup>

ルカ福音書15章では、イエスの語る物語が三つ含まれる。それらは譬え話 (*parable*) と呼ばれ、現実の身近かな生活の出来事を例にとって語られているのが特徴である。むろん、究極の狙いは宗教的真理の問題にあるのだが、譬え話は説得力をもたせ効果を狙って、世俗的な字義の意味を前面におしだしている。譬え話の物語形式に対して我々は、実生活の教訓およ

び二次的な文脈としてのイエスの教えといった両面性をまず念頭におく必要がある。

ところで、本論文にあっては以下の文章が分析対象とされる。

(1) Now the tax collectors and sinners were all drawing near to hear him. (2) And the Pharisees and the scribes murmured, saying, “This man receives sinners and eats with them.”

(3) So he told them this parable : (4) “What man of you, having a hundred sheep, if he has lost one of them, does not leave the ninety-nine in the wilderness, and go after the one which is lost, until he finds it ? (5) And when he has found it, he lays it on his shoulders, rejoicing. (6) And when he comes home, he calls together his friends and his neighbors, saying to them, ‘Rejoice with me, for I have found my sheep which was lost.’ (7) Just so, I tell you, there will be more joy in heaven over one sinner who repents than over ninety-nine righteous persons who need no repentance.

(8) “Or what woman, having ten silver coins, if she loses one coin, does not light a lamp and sweep the house and seek diligently until she finds it ? (9) And when she has found it, she calls together her friends and neighbors, saying, ‘Rejoice with me, for I have found the coin which I had lost.’ (10) Just so, I tell you, there is joy before the angels of God over one sinner who repents.”

(11) And he said, “There was a man who had two sons : (12) and the younger of them said to his father, ‘Father, give me the share of property that falls to me.’ And he divided his living between them. (13) Not many days later, the younger son gathered all he had and took his journey into a far country, and there he squandered his property in loose living. (14) And when he had spent everything, a great famine arose in that country, and he began to be in want. (15) So he went and joined himself to one of the citizens of that country, who sent him into his fields to feed swine. (16) And he would gladly have fed on the pods that the swine ate ; and no one gave him anything. (17) But when he came to himself he said, ‘How many of my father’s hired servants have bread enough and to spare, but I perish here with hunger ! (18) I will arise and go to my father, and I will

say to him, "Father, I have sinned against heaven and before you ; (19) I am no longer worthy to be called your son ; treat me as one of your hired servants." (20) And he arose and came to his father. But while he was yet at a distance, his father saw him and had compassion, and ran and embraced him and kissed him. (21) And the son said to him, 'Father, I have sinned against heaven and before you ; I am no longer worthy to be called your son.' (22) But the father said to his servants, 'Bring quickly the best robe, and put it on him ; and put a ring on his hand, and shoes on his feet ; (23) and bring the fatted calf and kill it, and let us eat and make merry ; (24) for this my son was dead, and is alive again ; he was lost, and is found.' And they began to make merry.

(25) "Now his elder son was in the field ; and as he came and drew near to the house, he heard music and dancing. (26) And he called one of the servants and asked what this meant. (27) And he said to him, 'Your brother has come, and your father has killed the fatted calf, because he has received him safe and sound.' (28) But he was angry and refused to go in. His father came out and entreated him, (29) but he answered his father, 'Lo, these many years I have served you, and I never disobeyed your command ; yet you never gave me a kid, that I might make merry with my friends. (30) But when this son of yours came, who has devoured your living with harlots, you killed for him the fatted calf !' (31) And he said to him, 'Son, you are always with me, and all that is mine is yours. (32) It was fitting to make merry and be glad, for this your brother was dead, and is alive ; he was lost, and is found.' "

### テキストの枠組み

分析対象のテキストは 32 の節に分けられているが、この章中の節の分けは読解単位 (lexie) に相当するとみてよい。4—6 節, 8—9 節, 11 節半ば—32 節という具合に、レシが連鎖的に構成されていく。便宜上、前二者を II<sub>1</sub>, III<sub>1</sub> とする。最後のレシはテキストの段落分けに応じて、11—24 節と 25—32 節に下位区分され、各部分を IV, V とする。この下位区分の正当

性は、単にテキストの段落分けを無意図的に踏襲することから得ているのではなく、後の分析結果に基づく。また“just so”を冒頭に冠した7節ならびに10節（これらはII<sub>1</sub>, III<sub>1</sub>に後続する部分である）をII<sub>2</sub>, III<sub>2</sub>と決めておく。

“So he told them this parable” (3)はレシの発端を示しているが、一般的にレシはある特定の状況下で遂行されるはずであり、ここでも譬え話の語り出される状況、場面設定が1—2節で手短かに明示される。すなわちイエスが取税人や罪人たちと食卓を共にしている光景を見て、パリサイ人と律法学者らが“This man receives sinners and eats with them”と言う。〈言う〉はmurmur (2)に対する修飾成部 (modifiant) である。ここには明らかに、イエスの行為に対する非難めいた挑発がこめられている。譬え話は彼らに対するイエスの反応としての言表行為である。勿論、そうした反応という意味を越えて、面前の人達を代表とする人類一般に向けられたメッセージでもある。その局面は無視できない。だが、テキスト内部で直接にはイエスの行動に非難を浴せたパリサイ人と律法学者に、語りが向けられているのである。

場面設定をよりよく理解するためには、ここで文化コードの体系に手がかりを求める必要がある。律法がユダヤ人の日常生活をこと細かに規定したことは周知の事実である。律法学者は、この律法を遵守することに固執し、次第に拘子定規な形式主義や儀式主義、偏狭な伝統主義に墮していった。このような律法学者によって指導された一般の信者がパリサイ人なのである。紀元直前の頃には彼らは、一種の宗教教団を作り上げた。加盟に際し、10分の1税の納付が課せられ、きよめの規則を守る義務があった。イエス—対—パリサイ人・律法学者、この対立項が語りの動機づけを与え、以下のテキストを動かしている点に留意すべきである。

さらに読み取れる特徴は、三題の譬え話が一種の象嵌法的な手法でテキスト全体の中に投げ込まれていることである。つまり、それらが、より大きな枠組みを形づくるレシの内部に挿入される、といった形式をとっているわけである。とは言っても、物語の発端は見出せるが、そのしめくりとなる肝心の部分は欠落し、三番目の譬え話で唐突に終わる。この中断、不整合な形態は当該テキストに目立つ指標であることにも注目したい。

これらの譬え話に関して、他にもいくつかの指標が浮かび上がってこよ

う。その第一は、II, IIIに比べてIVの分量が多い点である。これはやはり、IVに力点が置かれている証拠であろう。IVにVを結合させれば、分量はさらに増大する。第二に、比較ないし類比の要素の存在を明示する“just so”という言葉がII, IIIに見出される(先にこれらの言葉を含む文をII<sub>2</sub>, III<sub>2</sub>と定めた)一方で、IV, Vにはそれに相当するものがない。従って、比喩要素と被比喩要素の対応関係から言述が置き換え可能となるのはII, IIIだけであって、IVではそれ自体を孤立させて検討する場合、字義通りの平面から別の被比喩的要素の平面域に移行しえないように見える。Vの箇所も同様である。

以上のことから、II, IIIはある種の類似性を保っているのではないかとおおよその見当がつけられる。次にII, IIIを個別的に分析するよりも同時的にみていくことにする。

## II と III の 相 同 性

統辞論的な観点に立ち、動詞群の抽出を試みる。ここではクリステツアの唱える連結子の概念<sup>2)</sup>が有効で、それに準拠しながら順次列挙する。するとII<sub>1</sub>の部分では、

〈having〉—〈has lost〉—〈leave〉—〈go〉—〈is lost〉—〈finds〉—〈has found〉  
—〈lays〉—〈rejoicing〉—〈comes〉—〈calls〉—〈saying〉—〈rejoice〉—〈have  
found〉—〈was lost〉

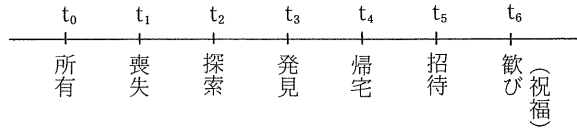
となる。そのうち頻出度大のもの：lose の動詞系列(3度)、同じく find の動詞系列(3度)。III<sub>1</sub>の部分では、

〈having〉—〈loses〉—〈light〉—〈sweep〉—〈seek〉—〈finds〉—〈has found〉  
—〈calls〉—〈saying〉—〈rejoice〉—〈has found〉—〈had lost〉

であり、高い頻出度を示すものは lose の動詞系列(2度)、find の動詞系列(3度)となっている。喪失／発見がレシの重要な装置として仕組まれ

ている。II<sub>2</sub>, III<sub>2</sub>は、物語の結部つまり譬えられる対象が指示される箇所であり、直接物語世界に属さないの、さし当たり削除する。II<sub>1</sub>, III<sub>1</sub>にはきわめてよく照合しあう項目が認められることであろう。各連結子に対して意味変換をほどこすと、

[ 1 ] 時間の軸 →



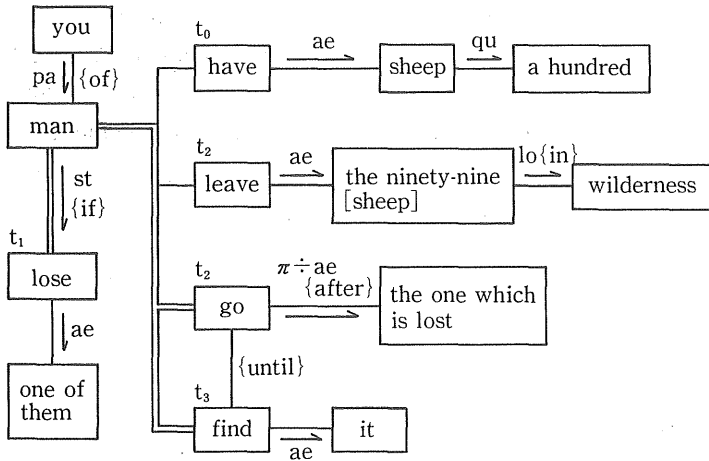
というような図式で事件の線状的な展開を示すことができる。III<sub>1</sub>では、銀貨の喪失は婦人の家屋内で起こるので、t<sub>4</sub>が欠如する。上表から判かるように、行為主体（所有者）が客体（失われたもの）を発見し、その歓びを〈友人や隣人たち〉とわかちあう、というのが筋立てである。いずれもそれを共通構造にしている。ただしII<sub>1</sub>とIII<sub>1</sub>とでは、行為の主体と客体内容のカテゴリーに差異が設けられる。主体の局面では man/woman(男性/女性)というように性別が、客体の局面では sheep/coin (有生物/無生物)というように等価対立の二項が見られる。

さらに看過できない点だが、行為の客体に別の対立が表われる。それは客体に冠された数詞に係わる要素、例えば“the one which is lost” (4), “one coin” (8) である。これらの要素は、数量が単一であるという肯定的側面と共に、対立補完的な関係において 99, 9 ではないという排除的否定的意味をあわせもつ。つまり 1 匹の羊/99 匹の羊(非-迷える羊), 1 枚の銀貨/9 枚の銀貨(非-失った 1 枚の銀貨)。しかしながら、いつまでも対立関係に留まるわけではない。羊飼いと婦人の探索によってやがて対立が調停され、99 匹が 100 匹に、あるいは 9 枚が 10 枚にという風に本来の状態に復帰する。単数/複数として記される上述の関係は、羊飼いと婦人の立場から見れば、次のことを示唆する。たとえ数多く (99 匹, 9 枚) のものを手元を持っていようとも、不在の 1 匹, 1 枚をおろそかにしない。単数は従って、複数との対比においても最小の数とはいえ、不可欠の部分を表わすのである。

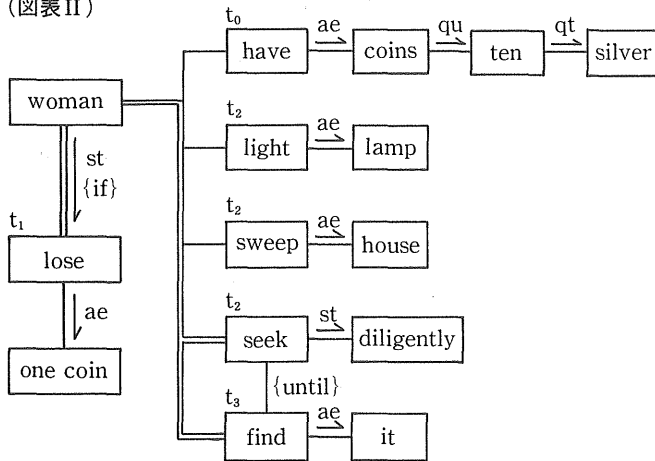
次の段階では、II<sub>1</sub>, III<sub>1</sub>の相互関係を文や句のレベルで検討してみよう。

4 節と 8 節の対照性。樹形図でまとめると、このようになる。

(図表 I)



(図表 II)



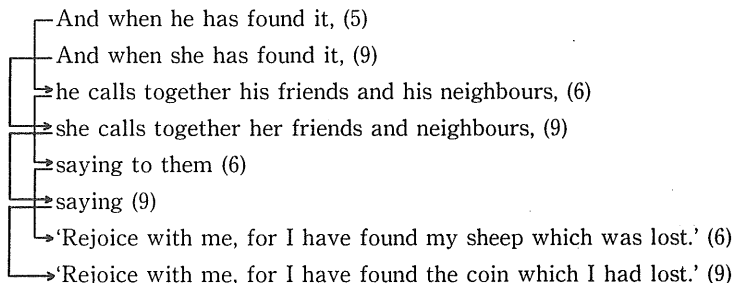
ae: 被動体 pa: ~の部分 qu: ~の数量 st: ~の状態  
 lo: ~の場所 π: 隣接 qt: ~の材質 二重線: 基本線  
 t<sub>0</sub>~t<sub>3</sub>: 既述の〔1〕の時間区分  
 矢印の右の要素は結合可能性を有する近似的クラスに  
 包含されうる。

上の二つの図表では項目の増減が見られるけれども、根本的にはほぼ同一の構造を有することが判明するだろう。図表 I を範列論的な軸に沿って選択肢を立て続ける場合、我々は同一の範列 (paradigm) に属する選択肢が図表 II に発見できるという結果を獲得する。すなわち、man → woman, a hundred sheep → ten silver coins, the ninety-nine → the nine という具合なのである。この事例は、他ならぬ図表 I, II の相互互換性を高める。

II<sub>1</sub>, III<sub>1</sub> の冒頭部の “what” および “does not” を図表に含めなかった。4 節と 8 節のそうした語は、統辞論的な parallelism を配した、反語的な修辞コードとしていずれも読めるからである。

他にも parallelism による表現が頻繁にうかがえる。例えば、

[ 2 ]



上記箇所での矢印のついた実線は連辞論的 (syntagmatic) 軸に沿って進むことを意味する。鮮やかに対照的な対句の形式を示していることが判かる。

また譬え話の結びでも対照法的な扱いを受けて、

[ 3 ]

Just so, I tell you, there will be A , (7)

Just so, I tell you, there is B , (10)

と語られる。ここでの言表の焦点は A, B の部分にあるが、〈喜び〉が両部分に共通の決定因子となっている。従って上記 7, 10 節の文はきわめて類似的である。もっとも、7 節では未来形 “will” が付加されている。そのた



めにイエスの言表態度 (Modus)、譬え話に関する言表行為の本来的動機が、わずかながら開陳されている。“will”の語は、他の人々にさきがけて未来での事態を予測するイエスのイメージを喚起し、暗示する。こうした話し手イエスのとる態度はIIIにもIV, Vにも皆無で、言表内容である言表事態 (Dictum) ばかりが全テキストを支配していることは注目してよい。

### 譬え話 II<sub>1</sub>, III<sub>1</sub> の結部 (II<sub>2</sub>, III<sub>2</sub>)

7, 10 節において比喻による指示対象が明瞭化されていた。その点については既に触れたところである。ここでは、さらに詳細に検討してみたい。前者の場合、歎びの度合の高低をめぐって“one sinner who repents”と“ninety-nine righteous persons who need no repentance”とが比較対照される。数詞 one, ninety-nine の既述の分析から当然のこと、その人物たちは一匹の迷える羊と 99 匹の羊に対応させることが可能である。そして我々は悔い改めの有無を比較基準に定めながら、四項の比例関係を次のように検出しよう。

[ 4 ]

one lost sheep : the ninety-nine sheep = one sinner (+repentance) : the ninety-nine righteous persons (-repentance)

[ + : 有標的 (marked) - : 無標的 (unmarked) ]

同様に、

[ 5 ]

one lost coin : X = one sinner (+repentance) : Y

二番目の譬え話IIIでは、表層構造の次元でみると、X, Y は欠如している。だがII, IIIの緊密な類似性の故に X, Y は十分に穴埋め可能である。つまり、X には 9 枚の銀貨が、Y には -repentance で義ある 9 人の者があてはまる。

これらの図式はさらに、イエスの語りの現場であるレシの発端部に対応させなければならない。何故なら、レシの発端部は同時に譬え話の言表の

動機を内在させているからである。

そこで、

[ 6 ]

$$\left[ \begin{array}{l} \text{one lost sheep} \\ \text{one lost coin} \end{array} \right] : \left[ \begin{array}{l} \text{the ninety-nine sheep} \\ \text{the nine coins} \end{array} \right]$$

= one sinner : the ninety-nine righteous persons

$$= \left[ \begin{array}{l} \text{the tax collectors} \\ \text{sinners} \end{array} \right] : \left[ \begin{array}{l} \text{the Pharisees} \\ \text{the scribes} \end{array} \right]$$

という風に諸要素間の関係が作成し直せるであろう。

#### IV, Vの場面分析と行為体モデル

以上でII, IIIが対をなした譬え話であることが判明した。次に連辞的読みに従ってIV, Vに進みたい。レシの発端部につながる“*And he said*” (II)の存在によって、新たな譬え話が導入される。等位接続詞“*And*”は、先行するテキストと以下の隣接する文脈とを接続させる物語コードに属し、“*he*”は連辞関係の軸においてイエスに置換される。

一読するところ、IVの部分では弟息子に関する記述量が多く、12節の2番目の文、それと14節の重文の後半を除いて、弟息子が主語の位置を占める。一方、20節に至ってからは父親も主語の位置におさまる。Vに移ると、弟息子の動向は全く背後に退き、代わって新たに兄息子が登場してくる。父一兄息子の関係が主題に沿う形で中心部を形成するのである。父一弟息子および父一兄息子、これら両軸の展開を共々に考慮しなければ、11節の物語コード、〈二人の息子をもつ父親〉の指摘が有益な出発点を提供している事実を、我々は見落としてしまうだろう。従って当面、当該のパラグラフは印刷上の単位に即応して、IV, Vと分けられるのだが、究極的には父の人物機能を連辞的軸の中枢と見なし、両部分の一つなごの物語構造と考

えるべきである。両部分の連続—非連続性の問題は後で言及することとして、まずは当該テキストを連辞論的レベルに基づいて分割を試みる。というのは、このテキストが意味論的に言って、発展的性格の連辞形態であり、物語性の強さを発揮するからである。

場面1：“There was a man who had tow sons” (11)という文が出だしに表われる。それは単に人物が存在することを言うだけの空虚な内容表現に留まるばかりでない。重要なのは前述のごとく〈ある人〉が話題の中心にすえられている点である。つまり、それは父を中核とする家族という一種の社会秩序の存在提示である。だが12節（これは11節と一緒に長文を構成する等位構文）で、ただちに弟息子の話題への移行が見られる。弟息子は父親に財産分与を願い出る——自立への欲求。息子の申し出に父は応じる。ここでは父の存在感ははまだ稀薄で、中立的なイメージがかりうじて感知できる程度である。

場面2：“Not many days later” という時間コードが次のシークエンスへの移行を促す。ここでは語彙項目、特に弟息子（行為項）に対する述語的連結子を拾いあげれば、分析の遂行に有効である。〈集める〉、〈(旅行)する〉、〈浪費する〉（以上13節）〈困窮し始める〉（14）。これらの語は連鎖をなして下降のイメージを作り上げ、意味的に零落への方向指示を行う。これは父親からの離脱とか家郷からの訣別とかを前提として可能となる。庇護という意味表示を家郷がおわされているとすれば、反対に“a far country” (13)は特種な地理上のコードに結びつくことになる。異郷は要するに、弟息子にとって転落の一途をたどる場所に他ならない。

場面3：困窮のあまり、弟息子は豚飼いの仕事に従事し、豚の餌を食べたいと思うまでに空腹状態になる。そこで彼は己れに帰って反省する。転換は行為項の自主的活動の帰結として示されるのである。17—19節の悔い改めの内容提示の仕方は弟息子の独白形式をとっており、呼びかけコード“Father”が効果的に使用されている。15章のテキスト全般にわたって呼びかけコードは、人物相互の関係を自覚させる方向で動いている。

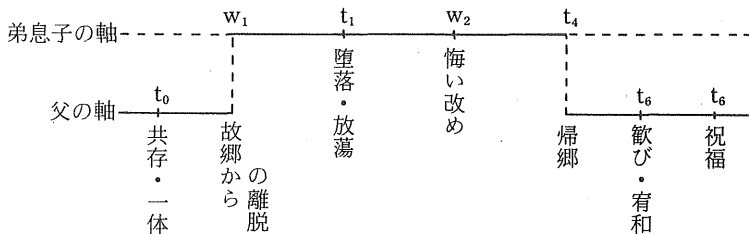
場面4：弟息子の帰郷と父の出迎え。前二節ですでに悔い改めを行った今では、帰郷を果たし父の前で悔い改めることが残されるだけである。外的行為としてのその実践が20—21節で導入される。従って21節は18—19節の再録、繰り返しにすぎない。この場面で特筆すべきは、もはや弟息子

の言動ではなく、父の愛情あふれる姿と寛容な態度である。遠方の弟息子を目にすると、父は〈哀れみ、走って彼をいだき接吻をした〉(26)。弟息子を待ち受けているのではなくて、彼自らが走り寄って出迎えている。弟息子の許しの言葉には応答せず、最上の着物と指輪、靴を身につけさせるように召使いに指示する。この待遇は客としての最高のもてなしを意味する。その上、仔牛をほうむって宴会を開くように命ずる。歓迎／贈物／宴会、この特徴群はいずれも父の〈歓び〉の意義を指向しており、今やIVの部分は、二つの先行する譬え話と同一の要点（すなわち神の赦しの本性）を内包することが明白となる。宴会を開いて祝う理由が、24節で父の発言において示されている。

“for this my son was dead, and is alive again ; he was lost, and is found.”  
(24)

II, IIIの部分にも見出される lose-find-rejoice の因果的系列が、ここでも決定的因子として働くが、一方で人間／有生物ないしは無生物の区別が考慮されて、dead-alive という人間特有の事象が賦与されている。これと関連したことであるが、羊や銀貨には認められない人間的所作がそこに検出されるであろう。その最大の差異は自由の有無にある。II, IIIの羊や銀貨の場合は静止的で平板な機能しか呈しないのに対し、IVの部分では、弟息子が非常に奥行きのある生き生きとした人間像を備えているのも、彼の自由意志や人格性のためである。事件の展開はそれ故、起伏に富み、より複雑な仕方を示す。すなわち、

[ 7 ]



上図から明らかなように、要素 $W_1-W_2$ あるいは $t_1-t_4$ の線は、呈示済みの同種の図 [1] にはない自由意志の行為の階層であって、弟息子の軸に属する軸として現われる点は注目すべきである。弟息子は自由意志の機能を帯びるので、〈離脱から帰還へ〉という転換を支える根本要因の〈悔い改め〉が一層強力な働きを演ずるわけである。だが一方で、 $W_1-t_1-W_2-t_4$ の次元での弟息子の動きがより奔放で恣意的であれば、 $t_0-t_6$ の方向が圧倒的な優位を保ち、図全体は父の〈寛大さ〉、〈愛情深さ〉という記号体系を示すのである。

さらに、II-IVの連辞的なレシ構造から見た場合は、顕在的な言表レベルにおいてII、IIIと同一のパターンがIVで反覆操作されている。すなわち [迷える羊/失われた銀貨/弟息子]、[羊飼ひ/婦人/父]という代替配列が、行為の主体と客体との間に解釈可能となる。IVでは、弟息子と父がII、IIIの行為主体と客体に認知できないほど生き生きと描かれる。その意味で同一パターンの反覆とは言え、線状的な筋展開はIVで一応の完結を見る。

ところが、レシはここでは終わらないのである。次の場面5 (Vの部分) では弟息子は登場しない。II、IIIに接続するパターンがくずれてしまっている。我々が読み取することはむしろ、父と兄息子の関係ないしは位置づけが圧倒的な組み合わせとなって、場面全体を構成する点である。ここでは兄息子はやはり、父に対して補完的役割を担うものである。だが、兄息子そのものの機能は、IVまでは見出せない。その意味で場面5は、既述の場面から全く別の展開を遂げているとも言えよう。

兄息子の人物機能は次のような語句から判断できる。〈畑にいた (was in the field)〉(25)の言葉は労働における勤勉さを指示し、“this son of yours”

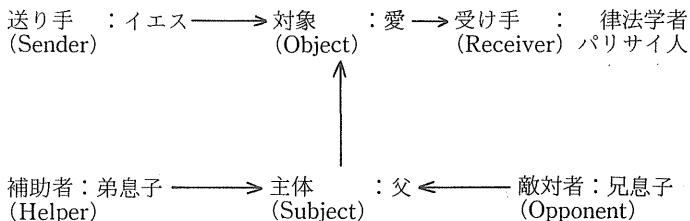
(30) という言い方には、自分の弟が他人であるかのような彼の態度を暗示する (それに関連して、対照的に弟息子の“Father”という呼びかけにおける親しみを想起せよ)。また “I never disobeyed your command” (29) といった父に対する兄息子の抗議は、父への忠節、従順さという実績を踏まえて行われる。掟を破らない自己の正当性に対する意識が、弟息子への父の態度に接した時、妬みや立腹へ変じていくのは無理からぬことであるが、実はもともと父への服従に不純な要素が含まれていたことが曝露されるのである。この局面を迎えて、勤勉さや実直さが兄息子の長所として、反面、狭量や嫉妬深さが短所として描き出される。

“yet you never gave me a kid, that I might make merry with my friends.” (29)これが兄息子の非難の眼目である。仔牛を屠殺して宴席を設けることは、文化コードの体系に依拠すれば、決して軽々しい意味に捉えてはならない。ユダヤ社会においてそれは余程稀な出来事で、それだけに計り知れない父の喜びを表わしているだろう。遊興の徒である弟息子が己れの本心に還り、悔い改めるが故に、父は喜び祝宴をはることとなった。だからと言って、父の愛に不公平があるわけではない。彼は長所短所を公平に判断し、二人に欠点が認められるにもかかわらず、等しく受け容れようとする。弟息子が帰還したのを見て走り寄ったと同様に、兄息子が家に入るのを拒んだ時、父の方がわざわざ外に出て来て誘うこと(28節)は、父の普遍的な平等愛を端的に示している。

兄息子の非難に対する父の返事は、この延長線上で二重の方向に通じる。すなわち、① “for this your brother was dead, and is alive; he was lost, and is found.” (32) この言表は “your brother” を “my son” に置換すれば、24節と同じ文であり、さらに II<sub>1</sub>, III<sub>1</sub>でも対応箇所を指摘できる言葉である。父の返事は従って、羊飼いや婦人の歓ぶ理由と軌を一にする。② “Son, you are always with me, and all that is mine is yours.” (31) この別の理由づけは、平等愛の立場から兄息子に専ら関連させて語られる。そこでは、父は兄息子と一身体となった感情で貫かれ、兄弟のいずれに対する扱ひも差のないことが説かれている。

一番最後の譬え話の人物関係を理解するには、行為体のモデルに関する A.J. Greimas の図式化が参考になる。それはこのようになるであろうか。

[ 8 ]

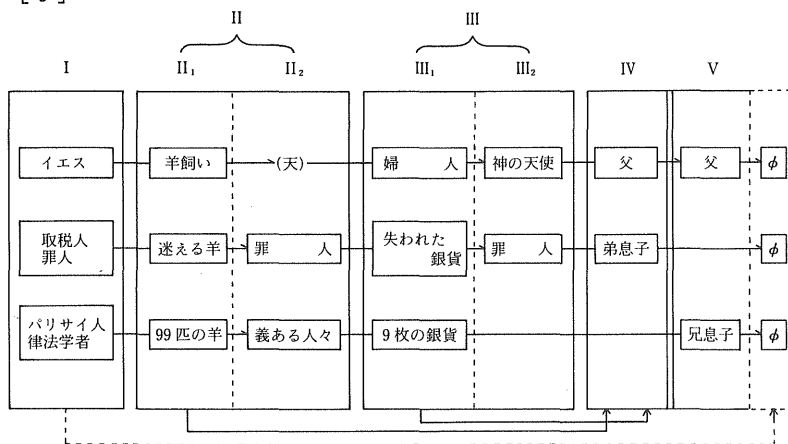


送り手はどのような種類の受け手に対して対象を伝えるべきかを、決める位置にある。受け手の側では伝達される対象が欠けている。伝達の送り手が存在してはじめて受け手への対象伝達が始められるけれども、主体が、もしくはそれにまつわる筋の軸が伝達の移行を可能とする。送り手—受け手の上段の軸、〈伝達の軸〉は最後の譬え話において外テキスト的、メタテキスト的性格をもつ。実際のところ、この軸はレシの発端部Ⅰに関係するということが重大である。その点は、次の〈むすび〉において言及したい。一方、下段の軸、〈意志の軸〉、〈プロット、軸、考案の軸〉<sup>3)</sup>では場面の三人の登場人物から構成されている。

### む す び

かくて、以上の種々の操作から明らかとなるのは、Ⅱ (Ⅱ<sub>1</sub>+Ⅱ<sub>2</sub>)とⅢ (Ⅲ<sub>1</sub>+Ⅲ<sub>2</sub>)が相同性を保つことである。また行為主体と客体との関係は、Ⅱ<sub>1</sub>、Ⅲ<sub>1</sub>、Ⅳ+Ⅴにそれぞれ対応が認められる。だが一方の事実として、Ⅳ、Ⅴでは父—弟息子、父—兄息子という人間関係に、その主体および客体関係が設定されるために、Ⅱ<sub>1</sub>、Ⅲ<sub>1</sub>よりも複雑な筋展開と人物の細部描写が実現化する。三題の譬え話を全体的に捉え直してみれば、

[ 9 ]



という図式が得られる。II, IIIの相同性およびII, IIIとIVとの間の同型性から、語りはII→III→IVと連続性を保ちながら繰り上げられる。II—III—IVは同一のグループに属する。II, IIIには被比喩的要素がII<sub>2</sub>, III<sub>2</sub>で顕在的であるのに対し、IVにおける父、弟息子の被比喩的要素は言表のテキストに提示されていない。つまり、 $\phi$ 表現である。Vでも同様に父—兄息子に対応する項、被比喩的要素が見当たらない( $\phi$ 表現)。まして15章全体が何を目指し、どこに焦点を絞っているのかは、非明示的である。各々の譬え話を孤立化して考察する場合、IとII—III—IV—Vとの間に明確な境界線が設けられ、Vの結末が中途半端な仕方で終止していることは否めない。図[9]の表示では、IとIIとの間の断絶は、II→IVまたIII→IVの矢印で表現できる。そしてVの不完全な結末は破線の境界線で示すこととする。

テキストの最後の部分IVとVは、“just so”を冒頭に冠するII<sub>2</sub>やIII<sub>2</sub>に相当する箇所を示さずにそっけなく終わる。しかし、イーザーが指摘するように、I—Vの全体的構造の中で考察すれば、Vの未完結性、従ってVに続く欠落部は、IVおよびVのテキスト内に強制指示するものがない代わりに、Iからの強い規定と制約を受けるのである。同一の場に置かれ、構造的に意味論的に等しく並置されると、たとえそこに欠落があるとしても、共通の枠組みがもたらされる。イーザーはこのような枠組みを〈空所〉と呼び、読者の読みの行為における想像によってそれは補充されるとする。まさに当該テキストの場合は、II, IIIとの緊密な相関関係によってもたらされる構造の力と意味作用が[父—弟息子/神—罪人]の対応項を誘発するために、その種の不完全さや欠落は十分に是正可能となっている。Vでの被比喩的要素に関しても同様である。それ故、弟息子—父—兄息子という言葉の記号内容がIでの[取税人・罪人—イエス—パリサイ人・律法学者]に転位されることは、必然的な帰結となる。図[9]から明白なように、神の立場の主張が首尾一貫基本軸を形成する。そしてIIからIII, IVと漸層法的順序をたどりながらVとなるに及んで、当該テキストはクライマックスに達する。そのことは、Iでのイエスの語りの動機から疑いようもなく確かである。

パリサイ人や律法学者がイエスの譬え話にどう反応したか、定かではない。イエスの発話はこの場合、一つの問いかけでもある。パリサイ人たち



の非難に直接応答せず、イエスは譬え話を連続して語る。この事実を再確認したい。問いかけが開かれたまま終わる状態は直ちに、パリサイ人や律法学者たちの小さなサークルをこえて、一般的に聴き手として、問われるべき者としてテキストを前にする読者にメッセージが向けられていることを意味するであろう。

最後にあたり次の点を付言しておきたいと思う。近代以降、当該分析箇所のうちIVの弟息子の箇所が、物語として一人歩きするに至った。しかし、それは本来のテキストに準拠する把握の仕方ではあるまい。そのような歪曲、部分的把握は近代における解釈者の精神構造の変質に基づくのかもしれない。いずれにせよ、我々は構造分析の遂行の結果において、弟息子の物語が父の愛情という主題の下にのみ成立することが容易に推測できるであろう。

### 【註】

本論における使用テキストとして、

The New Oxford Annotated Bible with the Apocrypha, New York, Oxford University Press, 1977.

を取り上げた。

- 1) もっとも、構造分析にあつては、いかなる英訳聖書であれ、基本構造に何ら変わりはない。分析に際して特定のテキストを選ばざるを得ないが、かりにその異文を考察したとしても、テキストの不変項が相変わらず抽出されるであろう。イエスはガリラヤなまりのアラム語を話していたようだから、イエスの言葉のギリシア語への翻訳は意味のずれを生む。英語への翻訳もまた同じ状況下にあると考えられるが、こうした発想が問題にならないことは、テキスト構造分析の本質から自明的であろう。
- 2) ジュリア・クリステヴァ『テキストとしての小説』谷口勇訳、国友社、1985年199—229頁。
- 3) ダニエル・パット『構造主義的聖書釈義とは何か』山内一郎他訳、ヨルダン社、1984年98頁。
- 4) Wolfgang Iser, The Act of Reading, The Johns Hopkins University

Press, Baltimore and London, 1978, p.p. 197—198.

なお、本論中における引用箇所の上に記す括弧の中の数字は聖書中の節の番号とする。

[参考文献]

- Samuel R. Levin, *The Semantic of Metaphor*, The Johns Hopkins University Press, Baltimore and London, 1977.
- *A Commentary on the Gospel according to St. Luke*, ed. by A.R.C. Leaney, Adam & Charles Black, London, 1976.
  
- J.B.ファージュ『構造主義入門』 加藤晴久訳, 大修館書店, 1972年.
- R.バルト/J.スタロバンスキー他『構造主義と聖書解釈』 久米博他訳, ヨルダン社, 1977年.
- H.ヴァインリヒ『言語とテキスト』 脇坂豊他訳, 紀伊國屋書店, 1984年.
- R.d.ボウブランド/W.ドレスラー『テキスト言語学入門』 池上嘉彦他訳, 紀伊國屋書店, 1984年.
- ダニエル・ロプス『イエス時代の日常生活』 I 山本書店, 1961年.
- ノーマン・ペイン『新約聖書における象徴と比喩』 高橋敬基訳, 教文館, 1981年.